人と人をつなぐ・・・

FURE サテライト新聞

2016年5月発行　第3号

FURE
イメージキャラめばえちゃん

発行

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター
（FURE）

相双地域支援サテライト

TEL　0240(23)6675
HP　http://ifs.fure.fukushima-u.ac.jp/

ランナーたちが春の川内路をさわやかに駆け抜けた

全国から約１２００人の愛好家が出場

第1回川内の郷かえるマラソン開催！

”公務員ランナー”川内優輝選手や吉田香織選手らも一緒に走る

多くの人が来てくれるマラソン大会を村で開いたらどうか？――。１人の小学生の提案がきっかけになり、企画された「第１回川内の郷かえるマラソン」実行委員会の主催、川内村・川内村商工会の共催）が４月30日、川内村ヘリポートをスタート・ゴールに開かれた。県内に限らず、北海道から沖縄まで、マラソン愛好家約１２００人がエントリー。芽吹いたばかりの若葉を付けた木々に囲まれる川内路を駆け抜け、さわやかな汗を流した。公務員ランナー」として知られる川内優輝さんやリオ五輪の代表候補に名乗りを上げていた吉田香織さんらゲストランナーも登場、沿道では村民たちが大きな声で声援を送り、盛り上がりを見せた。

昨年11月、川内小学校で行われた特別授業でのこと。講師を務めた当時の村役場総務課長へ、小学６年の男児がマラソン大会の開催を提案した。この時、同校の６年生は５人在籍。ほかの４人も高齢者と子どもが走って交流することや、村のクリーンアップ作戦へ参加することなどをアイディアを挙げた。

復興へ向けて歩むふるさとを思う子どもたちの気持ちに精一杯応えようと、さっそく動いた大人たち。約５カ月のスピードで、大会開催へとこぎつけ、子どもたちの提言も取り入れた。

村のシンボルの「カエル」と、「帰る」を掛け合わせて名づけられた大会は、ハーフマラソン（21・0975キロメートル）、10キロメートル、５キロメートル、親子１・５キロメートルの４部門を設けた。風が吹くものの、晴天に恵まれ、出場者たちは自然豊かな川内の魅力を感じながら走った。

ゲストランナーの川内優輝さんは、２人の弟・鮮輝、鴻輝さんと共に出場。２０１３年、自分と同じ名前の村が気になっていると村を訪れ、ジョギング大会で子どもたちと走り、マラソン大会が開催されれば、参加すると約束をしていた。優輝さんはハーフマラソンで断トツのトップでゴールすると、再度コースを走り、市民ランナーたちを励ましたり、ハイタッチ。写真撮影にも気軽に応じていた。

大会名にちなみ、カエルのかぶりものをしたり、さまざまな衣装を身に着けるなど、それぞれのスタイルで駆け抜けたランナーたち。村内を巡るコースの各所では、村民総出で応援する姿が見られた。

ショッピングセンターＹＯＲＩＴＡＳＨＩでは、かわうちよさこいクラブのメンバーがよさこい踊りでランナーを鼓舞。メンバーの子どもたちが沿道で「がんばれ！」と声を掛け、ランナーたちはハイタッチで応え、愛らしい声援に元気を得ていた。

ハーフを走り終えた川内選手は一般選手とハイタッチするなど励ましながら再度コースを走った

川内小の子どもたちも大声で声援を送った

川内村の子どもたちとのハイタッチでランナーもエネチャージ

川内小前では、児童たちが旗を振りながら声を枯らさんばかりに応援。ここでは給水所が設けられ、村民のボランティアも活躍した。

記念すべき初大会は無事に終了。またの参加を誓うランナーや、応援の楽しさに早くも次の大会を楽しみにする村民も。中学１年の孫を応援していた遠藤敏子さん（63）は「こんなに多くの人が出場して、走っている姿を見れてよかった。孫も元気に走っていた」と声を弾ませていた。

手打ちそばに挑戦！

楢葉もろもろ塾

新年度講座が始まる

楢葉町民がさまざまなことに挑戦して親睦を深めようと「楢葉もろもろ塾」が４月21日、いわき市平上山口の楢葉サポートセンター空の家で行われ、約40人が参加した。

塾は交流の場、生きがいづくりの場として―昨年スタート。昨年９月の避難指示解除後は、毎月第３木曜日に同センターと楢葉町のあおぞらこども園を交互に実施。これまでに、包丁研ぎや障子貼りなどの手仕事やキノコ栽培、餅つきなどを楽しんできた。

新年度１回目の同日は、昨年12月の塾で大好評だったそば打ちを開催。富岡町の渡辺鉄男さんら３人が講師を務めた。

懸命にそば打ち作業に励む参加者

渡辺さんは元々測量士で、川内村でそばの魅力に取りつかれ、そば打ちを始めた。現在は郡山市で避難生活を送るが、震災以前は富岡町でそば教室も開いていた。一般社団法人全麺協が初段から５段までを認定する素人そば打ち段位認定制度で４段の腕前を持つ。全国では約１万人の段位認定者がいるが、４段の取得者はわずか約８００人しかいない。

分かりやすく指導する渡辺さん

参加者は渡辺さんら講師人のアドバイスを受けながら挑戦。おいしいそばになるようにと、思いを込めながら練り、粉が生地へと変わると、麺棒で伸ばした。力加減が難しく、なかなか大変だわ」と思わず本音が漏れる参加者も。０・５ミリほどの薄さまで生地を伸ばすと、神経を研ぎ澄まして慎重に包丁を動かして麺を作った。

約１時間ほどでそばは完成し、さっそく打ちたてのそばをゆでて味わった。手打ちそばは格別とばかりに、にんまりと笑顔を浮かべていた。

今後も楢葉、いわきと交互に開催予定で、当面はそば打ちを行う。塾長の猪狩秀男さんは「塾を通して新しいつながりが生まれればれば」と話した。

問い合わせは猪狩さん＝電話０９０―１０６４）０６１６＝まで。

営農再開の歩み

楢葉町・上繁岡水田復興会

１・種まきを行う

種まきからどのぐらいで発芽するかを尋ねた時のこと。６年ぶりだもん、忘れちゃったなぁ」。笑ってはいたが、その言葉が、とても重く響いた。

◇　◇

昨年９月に避難指示が解除された楢葉町では、本年度から本格的に米の作付が始まり、14の個人・団体が営農を再開した。約20ヘクタールの水田で作付が行われるが、東京電力福島第一原子力発電所事故前は、約４１００ヘクタールで主食用米が栽培されていた。

町北部の上繁岡地区で、営農再開に取り組む団体がある。上繁岡水田復興会だ。

代表の佐藤さん

代表は佐藤充男さん（72）で、避難先のいわき市と楢葉町を往復し、作業に取り組む。19歳の時に父親を亡くし、農業と畜産業を継いだ。牛の繁殖を手掛けていたが、原発事故で牛は泣く泣く殺処分した。

同復興会は、牛の繁殖の仲間と作っていた上繁岡和牛研究会が母体。２０１３（平成25）年に、６人の仲間で結成した。

農地は放置すると荒れてしまう。先祖代々受け継いできた農地を守るためにも、水田を再開させようという仲間たちが集まった。

６年ぶりの種まき。時折笑い声も響いた

下人じゃやらなかった。やっぺという人がいて、やる気になった。１人だったら、今頃パチンコばっかりしてたかもしんねえな」

その言葉に、仲間たちも笑った。

佐藤さんは、さらに続ける。「仲間でやるから、わいわいできるからね。だからできるんだよ」

昨年まで取り組んでいた実証栽培は、別な場所で作られた苗を植えていたが、今年は６年ぶりに、１からの作業となる。４月27日、その第一歩の種まきを行った。

その一歩を祝うような晴天だった。復興会メンバーの笑い声が響いた。機械で種をまいたのは、福島県のオリジナルブランド米「天のつぶ」。４・５ヘクタールの水田に植えるため、約８００枚の苗床に種をまいた。

メンバーの１人がしみじみと言う。「５年食べてないからなぁ、自分で作った米。今年は、食べる楽しみを味わいたいね」

佐藤さんは、ようやく踏み出した一歩に、安堵の思いよりも心配の方が勝るのが本音だ。実証栽培を通して安全性は確認されているが、根強い風評被害への懸念も、頭をもたげる。

売れるかどうかもそうだし、いろいろ、問題もこれから出てくると思うと、複雑だ、って言ったほうがいいなぁ」

◇　◇

６年ぶりの営農再開を迎えた、上繁岡水田復興会。皆さんの活動の様子を、今後、本欄と当サテライトホームページで紹介する。

編集後記

川内の郷かえるマラソンでは、多くの仮装したランナーの姿に接しました。中には、Ｔシャツに川内村のみならず、地震被害を受けた熊本へのエールを記している人も▼個人的な話で恐縮ですが、故郷の熊本へＵターンした大学時代の同級生が、持前の行動力、正義感をいかし、避難所を回りながら支援物資を届けたり、今年１月の視察でお世話になった、水俣市の水俣病センター相思社さんが支援活動を行ったり、仲間の全国紙記者が取材活動に奔走しているなどの知らせに接すると、福島の地からできることはないかと、思案します。５年前、支援を受ける立場だっただけに、さまざまな状況を思い出しては、必要とされるときに力を貸せる人間でありたいと考えます▼今月も、新たな歩みを始めた人たちの姿などをご紹介させていただきました。全国の皆さんからいただいたエールを胸に、一歩を踏み出した方々の姿、思いをこれからもお届けさせていただければ幸いです。